

「ポレポレ」という言葉を耳にされたことがありますか？サファリ、ジャンボに続いて有名なスワヒリ語の言葉である。「ポレポレ」は、スワヒリ語では「POLE POLE」と表記し、よく「ゆっくりゆっくり」と日本語で訳されている。ひとつにすると「POLE」で、「すみません」という違う意味になる。そして、必ず「すべてがポレポレなアフリカ」、「アフリカ人のようにポレポレで行こう！」という風に使われる。私もアフリカに行く前、いろんなガイドブックを読んだ。広大な大地に落ちてゆく太陽をバックに象の群れがゆっくりと横切ってゆく。マサイの人々が牛を追いつつゆっくり歩く姿。「これがポレポレかあ」と憧憬の眼差しで見つめていたのを思い出す。その頃、大手町のビルに囲まれた職場で働いていて、対照的に見えたアフリカの景色に憧れ、そんな景色の中に早く自分も入りたいと願ったものだ。

そして月日は流れ、アフリカから帰国した。私は、ポレポレを見たのだろうか？ポレポレの中で生活していたのだろうか？答えは、「ノー」だ。私が暮らしたナイロビおよびその近郊の町は、ハラカ ハラカな時間が流れていた。バスに乗るときもたまたましていると、「ハラカ ハラカ」と背中を押される。友達とゆっくり喋りながら歩いている時もだ。横断歩道のない道を横切るときも、車の運転手はそう言って、早く渡るように促してくる。「ハラカ ハラカ (HARAKA HARAKA)」。日本語で「急いで、急いで」という意味だ。「これじゃあ、朝の東京駅の通勤ラッシュ時の横断歩道と同じではないか？」と着いて数日のうちに思った。マスコミや旅行会社のイメージ戦略にだまされた感じさえしていた。確かに、行くところに行けばポレポレなアフリカを感じることが出来る。高額なお金を出して泊まるサファリパーク内にあるロッジからの眺めや、外国人なんて見たことない田舎町の片隅で、のんびり紅茶をご馳走になるひとときや。でも、私の見たアフリカは、やっぱり早口・早足で闊歩する町の人々の姿だ。

アフリカの経済はますます二分していく傾向に

あると言われている。都市部のような資本主義の競争社会と農村部のような伝統社会だ。ケニア経済も例外ではなく、ナイロビのような大都市と、農村部の経済格差はどんどん広がってきている。その象徴がスラムの出現であろう。東アフリカ最大の「キベラスラム」は、その規模と歴史とも一番だ。ナイロビで仕事を求める農村部からの「国内移民」の行き先が、ナイロビ近郊にいくつとあるスラムなのだ。働き手の男性が一人で来るというよりは、家族全員での移住が多い。

そんなキベラのスラムで学校を開いているケニア在住の日本人女性に同行させてもらい、スラムを訪ねたことがある。その巨大なスラムは、きちんとした町である。道が作られ、どんどん奥へ入っていけるようになっている。狭い道をたどり、いくつもの家を通り過ぎると、彼女の運営する学校があった。教室には小さな子供たちがびっしりいて、元気よく挨拶してくれた。机やいすにきちんと座り勉強する様子を見せてもらう。そんな子供たちの後ろにはスラムが抱える問題が見え隠れする。ごみ問題、衛生問題、教育問題、雇用問題。そのすべてが貧困からくるのは、確かだ。そして、このスラムに住むには無料ではない。きちんと家主さんに家賃を払うのだ。もちろん普通よりは格安だが、滞納すると鍵をかけられ部屋に入れなくされるらしい。教会や病院もあり、市場もある。もちろん、水道や電気は整備されてはいないけれども、ここは住民手作りのきちんとした町なのだ。

またいろんな場所から来た人々の集まりであることは、そこで売られていたいろんな部族の食材から伺える。魚を食べるのは、ビクトリア湖周辺に住む西ケニア州のルオー族だろう。豆を量り売りしている店もある。豆を主食にしているのは、キクユ族だ。そして、はるか昔ケニア鉄道建設時に労働力としてつれてこられた隣国スーダン人もいる。彼らは、イスラム教で、ほとんどがキリスト教であるケニア人との間で摩擦を生じさせることもあるそうだ。その日本人女性は、「スラムには、ケニアの歴史が詰まっている」と結んだ。

そしてケニアのスラムをその後もいくつか訪ねたが、ポレポシな人や場所はなかった。すべての人が、生きるか死ぬかのサバイバルだった。サバンナを生きる野生動物たちもそうであろうと思う。独立後のケニアは資本主義の道を選択し、人々は生活するための糧をお金に求めた。いや、求めるように社会に強いられてきたのかも知れない。そして、お金を手に入れるため地方から家族総出で、ナイロビなどへの都市部へ移住してくるのだ。統計が示すように一日一ドル以下の生活をしている人々が町にはあふれている。

最も伝統的な生活を今でも続けているとされるマサイ族の生活にも変化が現れてきている。彼らは、伝統衣装を身にまとい、牛を追って、牛と共に生活してきた。しかし私は、マサイ族出身のビジネスマンを多く知っている。彼らはスーツを着こなし、携帯電話を片手に、流暢な英語で、ビジネスの世界に生きるどこの国でも見ることの出来る普通のビジネスマンだ。週末は、地元に戻って牛の世話をすることもあると聞く前は、その人がマサイであることも分からなかった。広大な土地を所有してきた彼らは、それを売り、資本とし、大規模なビジネスを展開している人も多い。

「昔は豊かだった」と振り返るマサイ族の老人の目には、独立後駆け足で資本主義化していったケニアはどう映っているのだろうか？それは、私の祖父母が戦後急速な経済発展を遂げた今の日本と昔の日本を比べたときに思うことと同じなのだろうか？しかし、発展が見えてこないアフリカの経

済は、途上国経済との名が示すように、今もあくまで途上なのだ。独立後すぐのケニアの GDP は、7%の成長率だった。そしてその後は現在にいたるまで下降の一途をたどっている。豊かだったケニアが、貧困に苦しんでいるのは、そんな昔からのことではない。私は、貧困が始まったのは、資本主義経済に組み込まれていった独立後からではないかと考える。お金が、人々の生活を支配し始めたからではないかと考える。

今でも農村を訪ねれば、豊かな生活をしていたころの面影が感じられる。畑から採れる恵みで家全員を養い、子供は地域の青空教室に行き、ゆっくりと生活をしていたアフリカ本来のポレポシな時間。

「植民地主義」。その後遺症は、こうしてアフリカのそのもののあり方を変えてしまった。アフリカの今後を考える G 7 の会議が、イギリスのブレア首相主催の下開かれた。「G7 諸国が、今一丸となってアフリカの発展のために取り組めば、アフリカは変わる。アフリカは救われる」と。私は思う。アフリカを変えるのは、もうやめてもらいたい。それよりも豊かだったアフリカをもとのようにするのは、どうしたらよいのかを考えてもらいたい。そしてそれを決めるのは、アフリカ人自身であるはずだ。

7 月号のエコノミストの表紙を飾る表題の文字に心惹かれた。“ Helping Africa to help itself ”つまり、アフリカの自助努力を応援しようということだ。